



Online edition ISSN 2187-7629 / Print edition: ISSN 2187-7610

漆胡瓶+仏女新聞

正倉院展 2016 特別号 飯島可琳

漆胡瓶が水鳥をかたどっていると聞いて、ほとんどの人がなるほど
と思うことだろう。注ぎ口は丸く短いくちばしを思わせるし、
美しくふっくらとした胴部は水鳥の身体を思わせる。
長い首は真っ直ぐのように見えて少し傾いている。
しきりに首をかしげる鳥の仕草のようでもある。
こうなると把手(とって)でさえ尾羽に見えてくる。
このようにして「水鳥のような水瓶」のイメージが
頭の中に出来上がっていく。宝物としてみると
生真面目で非の打ち所がないのだが、鳥として
みるとどこことなくユーモラスである。漆胡瓶に
親しみを感じるとすればそのせいだろうか。

水鳥をかたどっていると言っても、漆胡瓶の
鳥らしいところは水瓶としてのフォルムだけだ。



表面に散りばめられるのは羽毛ではなくて、端正な文様である。

銀板を切り抜いて作る草花や鹿などの形が貼り付けられている。

銀平脱技法というのだそうだ。非常に小さいが極めて

精巧に作られた模様は絵巻物の世界にも似ている。

漆胡瓶の緻密な模様を眺め続けていると、文様が
水瓶の底に沈んでいくような錯覚を覚えた。不思議
な感覚だ。たとえたとすれば、川面から川床を見るよ
うな感じだ。漆胡瓶は一つの物体だが、水瓶のフォルム
という存在とは別に、水瓶の表面に配置された文様とい
う存在がある。二つの存在が空間に結ぶ実像が漆胡瓶
であるといったらいいのだろうか。

ぜひ正倉院展会場で確かめてほしい。

第 68 回 正倉院展 奈良国立博物館

10月22日(土)~11月7日(月)

